変わる日本の「暮らし」と「まち」 no.40

鉄道の全線開通に沸く駅にやがて新たなまちが広がる

宮城県東松島市・野蒜北部丘陵地区震災復興事業

里中高志
Satonaka Takashi
illustration：Shigeyuki Sakata

2015年5月30日。宮城県東松島市にあるJR仙石線野蒜（のびる）駅の外では、石巻方面からやってきた4両編成の電車を人々が出迎えていた。

「祝仙石線全線開通」の横断幕を掲げ、東松島市のマークがプリントされた旗を振る。太鼓の音をバックに、揃いの浴衣の女性たちが踊りを舞う。線路沿いでは、お祝いの旗を掲げた人たちが通り過ぎる電車を見送っていた。

仙台から石巻までの47・2キロを結ぶJR仙石線。海岸沿いを走るこの路線は、2011年3月11日の震災で甚大な被害を受けた。特に陸前小野から高城町までの7つの駅区間は長らくバスの代行運転に頼っていた。それがこの日、待ちに待った全線再開が実現し、仙台と石巻を従来より約10分短い最速52分で結ぶ仙石東北ラインも開業したのだ。

震災から全線開通まで、4年と2ヶ月を要したのには理由がある。陸前小野から陸前大塚までの区間は線路を従来より高台に移設。野蒜駅と東名（とうな）駅は駅舎も高台に移したためだ。合わせて高台にまちを整備するために、山を切り開き、造成工事を施した。

この一大プロジェクトを担当したのが、UR都市機構の宮城・福島震災復興支援本部・東松島復興支援事務所の清水良祐所長だ。清水所長はこう述懐する。

「震災後、市町村の復興計画の策定や国の直轄調査があり、URが東松島市と復興支援の協定を結んで東松島市に事務所を開設したのが、震災の翌年の2012年4月のことでした。JRさんも同じ時期に東松島市と仙石線の復旧に向けて覚書と確認書を結んだ。そのときに、JRと東松島市、そしてURで、3年半をかけて全線再開しましょう、という意思確認がなされ、早期再開の目標が明確化されました」

3者の連携による成果

清水所長は、20年前の阪神淡路大震災でも復興事業に携わったベテランだ。その時の経験から、復興には何よりもスピードと合意形成が大事であることを実感していた。しかし、山を削って新しいまちを土台から作り出す工事は、並大抵の作業量ではなかった。

「市の最優先課題は、何といっても住宅の再建でした。東松島市防災集団移転促進事業では、被害が甚大だった7地区の市街地及び集落を移転促進区域に指定。その移転先として7地区の住宅団地の整備計画を策定しました。そのうち、野蒜北部丘陵地区と、東矢本駅北地区をURが担当することになったのです」

移転先の住宅団地の整備と線路の移設、駅の新設計画は連動している。新駅と住宅団地が一体となった、まったく新しいまちの整備が始まったのだ。野蒜では山を削ることで発生する土砂をベルトコンベヤーで運び、その搬出量は1日に10トンダンプ1650～2000台分に及んだ。

「当初、JRさんに引き渡す土地の高さは、海抜20メートルの設計でした。しかし、これを少しでも高いままにすれば、掘削する土砂が減って工事量が減り住民の方々に引き渡す日は早くなります。協議を重ねた結果、安全に電車が運行できる勾配を確保して、海抜22メートルに変更し、造成工事を短縮することに成功しました」

また、JRにも早く工事を進めてもらうため、造成工事が完了した箇所から順次引き渡していくようにした。双方の工事スケジュールの調整は細緻を極めたが、結果、全線開通に至る期間は当初の予定の3年半をさらに早める、3年1ヶ月ほどとなったのである。

「早く線路を移設して住民の移転を実現し、復興を遂げたいという願いは東松島市もJRもURも共通。同じところを向いているわけですよね。3者がうまく連携できたことが、今日の成果として結実したのだと思います」

JR仙石線開通で野蒜駅は歓迎ムード
山を切り開き宅地造成が行われる横を列車は走る

共に見る未来への夢

この日、朝8時ごろから仙石線石巻駅では記念式典が行われ、石巻市長や宮城県知事らが挨拶。テープカットやくす玉割りが行われたのち、市長たちは続いて野蒜駅での式典に参加した。日本中の報道関係者も注目する中、阿部秀保・東松島市長はスピーチでこう述べた。

「復興を早く具現化するためには役割分担が重要。誰が工事をするかにつきましては、阪神淡路大震災や新潟県中越沖地震からの復興まちづくりに実績のあるUR都市機構さんしかないということで、議会にもご理解いただきました。当初の予定より工期を短縮できましたのも、JRさんとURさん、そして東松島市民の皆さんの連携のおかげです。これからは通学・通勤に使われる利用者の方々の時間を取り戻していきたい。未来へのまち作りが今日スタートしたと受け止めさせていただきます」

その式典の様子を、感慨深げに眺めていたのが、東松島市野蒜まちづくり協議会会長の齋藤壽朗（じゅろう）さんと、野蒜北部丘陵振興協議会会長・齊藤均（ひとし）さんだ。ふたりはともにこの場所の新しいまち作りに奔走してきた。壽朗さんが言う。

「野蒜地区のうち沿岸近くは平らな土地だったので、津波で壊滅的な被害を受け、我々は内陸部の公民館などでの避難所暮らしを余儀なくされました。そのときに北側にある何十年も手つかずだった高台を開発できないかという話が出てきたのです。震災の年の5月8日に地域の行政区長が集まり、野蒜の丘陵地を開発してもらえないかということを市に要望したのが5月の11日でした。市のほうでも県や国と協議してくださり、計画が策定されたときにはこれで行き場所が確保できた、とほっとしました」

早くここが活気のあるまちになってほしい、と話す壽朗さん。均さんはこう話を引き継ぐ。

「自立再建用の宅地については2018年の7月から、公営住宅は19年の10月から引き渡しが始まることが決定済みです。動きが見えてきて、皆喜んでいるから、今日も『あまちゃん』みたいに盛り上げよう、と旗を振りにきてくれているんです。道半ばですが、未来への夢を持ちたい、という気持ちは誰もが共有している。公園や学校の建設も予定されているし、新しい地名や行政区、自治会づくりもこれから始まります。皆が集まれる東屋や子どもが入れる小さなプールもほしいですね」

住宅地や田んぼの間を走る路線は、野蒜駅と東名駅の間ではいま、削られたばかりの山肌を通り抜ける。やがて車窓からは新しい住宅群の風景が一気に広がるだろう。今日もまた一日、夢見る未来が現実となる日が近づいた。

街に、ルネッサンス
UR 新
UR都市機構
一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

［企画制作］新潮社